

1930年代ボストン・パリの輝きから戦後のシャンソンまで

大澤壽人

スペクタクルⅢ

2●12年3月3日(土)

場所／ザ・エニックスホール

開演／19時(18時30分開場／レクチャーあり)

神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による

HISATO OSAWA

# Contents 目次

---

## ご挨拶

大澤資料プロジェクト P. 2

大澤 壽文・佐智子、本庄 徳子 P. 3

大澤壽人先生略歴 P. 4

神戸女学院所蔵資料  
「大澤壽人遺作コレクション」 P. 5

出演者プロフィール P. 6

プログラム P. 7

---

プログラム・ノート P. 9

1920・30年代ボストン・パリの輝きから  
戦後のセミクラシックまで

生島 美紀子

## 演奏会に寄せて

本日は、神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」による〈大澤壽人スペクタクルⅢ〉にお運びいただきまして、ありがとうございます。

〈スペクタクル〉は作曲家であり、指揮者であった大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906-53）先生の作品を紹介する演奏会で、2009年12月、2010年3月に続いて今回がシリーズ3回目となります。

これまで5年にわたり、大澤資料プロジェクトは、先生の遺品資料の調査研究に携わってまいりました。2冊の作品目録を編纂し、膨大な作品群や関連資料を読み込む作業を通じて、先生の業績の偉大さを身をもって知ることとなりました。音楽に対する情熱と人生に対する思索と共に、先生は47年を駆け抜けられたのです。

生涯を通して展開された華麗な音楽活動は、広大な作品世界を形成しました。留学期の前衛的な演奏会用作品から晩年の親しみやすいラジオ用ホームソングまで、創作ジャンルの境界を越えた多彩な世界が、私たちの前に豊かな拡がりを見せています。この素晴らしい作品を聴いて頂きたい、という願いで〈スペクタクル〉を開催いたします。

今回は昨2011年8月に完成した2冊目の目録、『煌きの軌跡Ⅱ－神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」詳細目録－』に基づきます。

第一部は、セミクラシック風作品と前衛的作品を対比します。まず、戦後の映画主題歌《夢の花》と《ABCホームソング》。そして戦前、ボストンでのピアノ作品とパリ初演の歌曲《桜に寄す》。

第二部は、先生が活躍されたパリ楽壇に焦点を当てます。1935年に先生の《ピアノ協奏曲第二番》世界初演ソリストを務めたアンリ・ジル＝マルシェックスは、モーリス・ラヴェルと親交のある作曲家でもありました。ラヴェル、ジル＝マルシェックス、大澤の3作品を並べる特別企画から、華やかなパリと当時の日本の交流をお聴き下さい。

やがて迎えた戦争の時代。プログラム最後を戦中の連作歌曲《便り》が締めくくります。

戦前～戦中～戦後の困難な時代と重なった音楽活動。しかし先生は創作の筆を折ることなく、豊穡の実りを私たちに遺して下さいました。

それでは〈大澤壽人スペクタクルⅢ〉でその音楽をお楽しみ下さいませ。

大澤資料プロジェクト 生島 美紀子 (代表)

増永 智子・松川 峰子・高野 雅子・廣瀬 聖子



## ごあいさつ



寒かった冬が過ぎ、光あふれる春となりました。

本日は楽しい「ひなまつり」、ご多用のところ「大澤壽人スペクタクルⅢ」にご来場下さいまして誠にありがとうございます。

お蔭様で2009年12月から始まった「スペクタクル」も、はや3回目を迎える事ができました。これも一重に皆様方のご支援の賜物と深く感謝いたしますと共に、このプロジェクト代表の生島美紀子先生をはじめとする神戸女学院関係各位の皆様のご尽力に深謝する次第です。

一昨年秋、生島先生や他の方々や父の足跡を訪ねてボストンへ行って参りました。父がボストンで初めて住んだアパートも現存しており、又ボストン大学アーカイブセンターでは父が寄贈して以来大切に保管されている《交響曲第二番》の自筆譜を白い手袋着用で手に取り、感激のあまり思わず涙がこぼれ落ちました。その他、父がボストン大学と共に学んだニューイングランド音楽院や、自作の曲を初めて指揮したボストンシンフォニーホールや教会を訪ね、当時の父の様子が目に浮かび感無量の旅でした。

本日はボストン留学期の作品、パリ留学から帰国直後の作品、又ABCラジオホームソング、映画主題歌等々、盛りだくさんのプログラムが用意されております。最後までごゆっくりお楽しみいただけましたら幸いです。

この「大澤壽人スペクタクル」が未長く続きますよう、今後ともご支援賜りますよう心からお願い申し上げます。



大澤 寿文・佐智子

本庄 徳子



## 大澤 壽人先生略歴

1906／明治39年8月1日兵庫県神戸市に生まれる。関西学院高等商業学部卒業後1930／昭和5年に渡米。ボストン大学音楽学部、続いてニューイングランド音楽院で学び、フレデリック・コンヴァースに師事。交響曲・協奏曲・室内楽作品など数多くの演奏会用作品を作曲し、大学卒業時の1933／昭和8年6月にはボストン交響楽団（ポップス）を率いて自作《小交響曲》を披露した。同楽団を指揮した初の日本人である。

1934／昭和9年パリに渡り、ポール・デュカとナディア・ブーランジェに師事。翌年にはコンセール・パドゥルー管弦楽団を自ら指揮して《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》《桜に寄す》を発表。前衛的な作風と緻密な指揮で大成功をおさめるなど、当時の日本人としては稀な、華麗な経歴を築いた。

1936／昭和11年に帰国した後は神戸女学院の教壇に立つ。並行してNHKラジオ用音楽や音楽劇、宝塚や松竹歌劇団用の付随音楽、映画音楽、ジャズ風協奏曲からホームソング・校歌や社歌に至るまで、幅広いジャンルにおいて多彩な作品を創作。教育者・作曲家・編曲家・指揮者の役割を担いながら実力派として活躍の最中、1953／昭和28年10月28日に47歳で急逝。作曲・編曲合わせ900曲以上を遺した。

亡くなった後は人々の記憶から遠のき、また大澤家に数々の遺品が保管されていることも忘れられていたが、藤本賢市氏と片山杜秀氏によって貴重な自筆譜の存在が明るみに出た。没後半世紀を経て、片山氏監修によって代表作CDがリリースされると、「2004／平成16年度文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞」を受賞。以来、作品の素晴らしさが大きな話題を呼び、戦前・戦後の日本洋楽史における重要な作曲家として再評価が急速に進んでいる。

人々が注視するなか、2006／平成18年に遺品資料のすべては大澤家より神戸女学院へ寄贈された。



留学の頃



戦後、家族と一緒に

## 神戸女学院所蔵資料

# 「大澤壽人遺作コレクション」と資料目録『煌きの軌跡』

大澤壽人先生が遺された膨大な資料は、2006年8月にご子息大澤壽文氏から神戸女学院に寄贈された。自筆譜やパート譜、演奏会プログラム・ポスター、書簡、写真、録音テープ、愛用の指揮棒など、段ボール約43箱分の資料群は「大澤壽人遺作コレクション」と命名された。

コレクションは、中心となる貴重な自筆譜だけでも約1万枚、関連譜約2万枚、他の資料も合わせると総数は約3万点を超える。まさに圧倒的な質と量で、学院の宝となっている。これらのすべては大澤資料プロジェクトによって調査され、編纂された『煌きの軌跡－大澤壽人作品資料目録－』はクラブファンタジー全額助成によって刊行。先生の旺盛な創作活動を伝えたとして、2008年度音楽クリティック・クラブ特別賞を受賞した。

続いて、2011年8月には2冊目の目録、『煌きの軌跡Ⅱ－神戸女学院所蔵資料「大澤壽人遺作コレクション」詳細目録－』刊行。楽譜以外の全資料を調査し、情報を統合した網羅的リストで、今後、演奏者・研究者・愛好家のための基礎文献としての活用が期待される。

目録部分には作品毎に以下が記されている：自筆譜の原表記・楽器編成・楽章構成・歌いだし・五線紙種類などの楽譜情報、創作年・共同制作者・出版などの作品情報、初演日時・再演日時・会場・演奏者・演奏時間などの演奏情報、同様に放送情報、音源・プログラム・写真の有無などの資料情報。

また、巻末には大澤資料プロジェクト作成の「大澤壽人略年譜」「作品年譜」「演奏会と公演一覧」「放送一覧」、及び「ABCホームソング集一覧」が付され、作曲、編曲、指揮、教育までを含む音楽活動の全貌が明らかになった。これまで幻と思われていた大作や神戸女学院のための作品を含む作品年譜、また指揮活動を中心とした演奏歴や放送歴などの公開により、見上げる業績が改めて世に問われている。

### 資料閲覧と複写

「大澤壽人遺作コレクション」の楽譜は電子資料化が完了した。コンピューターによる閲覧と自筆譜コピーも入手可能である。詳細は神戸女学院図書館(TEL:0798-51-8565、kclmsg@mail.kobe-c.ac.jp) または大澤資料プロジェクト(osawa\_project@yahoo.co.jp)まで。



1949(昭和24)年11月 神戸女学院講堂にて

## Profile 出演者プロフィール



齋藤 言子 ソプラノ  
さいとう ことこ

神戸女学院大学音楽学部を経て同研究生修了。ミラノヴェルディ音楽院に留学し、コンクール受賞歴多数。以来、国内外で数々のオペラ主演、リサイタル等で活躍。天性の美声と洗練されたステージマナーにより関西二期会公演《天守物語》《ノルマ》等で絶賛された。現在神戸女学院大学教授、関西二期会常任理事、各種声楽コンクール審査員。



松川 峰子 ピアノ  
まつかわ みねこ

神戸女学院大学音楽学部を経て同大学院を首席修了、H・スエヒロ賞受賞。第6回安川加壽子記念コンクール入選等、受賞歴多数。2011年5月日本演奏連盟主催にてリサイタル開催。「大澤壽人スペクタクルI・II」に出演し《ピアノ協奏曲第一番 二台のピアノ用編曲》を世界初演。現在神戸女学院大学音楽学部非常勤講師。



別所 ユウキ ピアノ  
べっしょ ゆうき

神戸女学院大学音楽学部を首席卒業、H・スエヒロ賞、クラブファンタジー賞受賞。ブリュッセル王立音楽院マスター課程首席修了。ベルギー・ショパン財団や神戸女学院より那須姉妹奨学金を得る。英ニューポート国際音楽コンクール第3位及び審査員特別賞等、国内外で受賞歴多数。日本とヨーロッパで音楽活動を展開中。



増永 智子 ピアノ  
ますなが ともこ

神戸女学院大学音楽学部を経て京都市立芸術大学大学院修了。第6回ノーヴィ国際音楽コンクール第3位や第16回国際ピアノデュオコンクールスタインウェイ賞等、ソロやデュオで活動。「大澤壽人スペクタクルI・II」に出演し《ピアノ協奏曲第一番 二台のピアノ用編曲》を世界初演。大澤資料プロジェクトリーダー。



本庄 徳子 シャンソン  
ほんじょう とくこ

幼少期より父、大澤壽人の影響を受けて様々な音楽に親しむ。岡田晴美氏に声楽を師事した後、大阪音楽大学声楽科卒業。1999年よりくつわともこ氏に師事し、シャンソンやカンツォーネを歌い始める。新神戸オリエンタルホテルでのティータイムコンサートをはじめとしてステージを重ね、2008年にはディナーショーを開催。



蜷川 千佳 ピアノ  
にながわ ちか

神戸女学院大学音楽学部を経て同大学院修了。1993年ヤマハJOCにテレビ出演。2004年ポーランド国立クラクフ室内管弦楽団と共演。NHK名曲リサイタルに声楽伴奏で出演する等、ソロの他に声楽・器楽・合唱団の伴奏者としても活動。現在四條畷学園高等学校非常勤講師、関西二期会、堺シテオペラ各ピアニスト。



生島 美紀子 レクチャー  
いくしま みきこ

神戸女学院大学音楽学部を経てスタンフォード大学大学院修了、音楽学で日本人初のM.A.。大阪大学大学院に提出したアルチュール・オネケルの研究論文により博士号、同論文を出版（2007年 行路社）。大澤壽人作品目録「煌きの軌跡」「同II」を編集。現在神戸女学院大学音楽学部非常勤講師、大澤資料プロジェクト代表。

## 大澤 壽人先生略歴

1906／明治39年8月1日兵庫県神戸市に生まれる。関西学院高等商業学部卒業後1930／昭和5年に渡米。ボストン大学音楽学部、続いてニューイングランド音楽院で学び、フレデリック・コンヴァースに師事。交響曲・協奏曲・室内楽作品など数多くの演奏会用作品を作曲し、大学卒業時の1933／昭和8年6月にはボストン交響楽団（ポップス）を率いて自作《小交響曲》を披露した。同楽団を指揮した初の日本人である。

1934／昭和9年パリに渡り、ポール・デュカとナディア・ブーランジェに師事。翌年にはコンセール・パドゥルー管弦楽団を自ら指揮して《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》《桜に寄す》を発表。前衛的な作風と緻密な指揮で大成功をおさめるなど、当時の日本人としては稀な、華麗な経歴を築いた。

1936／昭和11年に帰国した後は神戸女学院の教壇に立つ。並行してNHKラジオ用音楽や音楽劇、宝塚や松竹歌劇団用の付随音楽、映画音楽、ジャズ風協奏曲からホームソング・校歌や社歌に至るまで、幅広いジャンルにおいて多彩な作品を創作。教育者・作曲家・編曲家・指揮者の役割を担いながら実力派として活躍の最中、1953／昭和28年10月28日に47歳で急逝。作曲・編曲合わせ900曲以上を遺した。

亡くなった後は人々の記憶から遠のき、また大澤家に数々の遺品が保管されていることも忘れられていたが、藤本賢市氏と片山杜秀氏によって貴重な自筆譜の存在が明るみに出た。没後半世紀を経て、片山氏監修によって代表作CDがリリースされると、「2004／平成16年度文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞」を受賞。以来、作品の素晴らしさが大きな話題を呼び、戦前・戦後の日本洋楽史における重要な作曲家として再評価が急速に進んでいる。

人々が注視するなか、2006／平成18年に遺品資料のすべては大澤家より神戸女学院へ寄贈された。



留学の頃



戦後、家族と一緒に





## II部：1920・30年代パリ楽壇の輝きと 当時の日本の交流、そして戦中

歌劇《子供と魔法》より〈五時のフォックストロット〉(1925年)

モーリス・ラヴェル作曲、アンリ・ジル＝マルシェックス編曲・初演 別所 ユウキ(Pf)

《古き日本の二つの映像》より〈吉原からの帰り〉(1934年版権)

アンリ・ジル＝マルシェックス作曲・初演 増永 智子(Pf)

てい ちゅう はる さん だい  
丁丑春三題(1937年神戸)

大澤壽人作曲、アンリ・ジル＝マルシェックス初演 松川 峰子(Pf)

組詩曲《便り》(1942年神戸)復活演奏

大澤壽人 作曲、中野繁雄 詩

- 一. 武運長久祈願
- 二. ゴム毬
- 三. 吾子成長す
- 四. 豊年
- 五. 銃後

斎藤 言子(Sop)・蜷川 千佳(Pf)



パリ時代



帰国後、愛用のペヒシュタイン製ピアノの前で

## I 部：戦後のセミクラシック作品と戦前の前衛的作品

大澤壽人の創作活動を戦前・戦中・戦後に分けると、戦後の作風は自由闊達、創作ジャンルも多岐にわたっている。ジャズを取り入れた作品が登場し、映画音楽に本格的に進出し、作曲作品を上回る数の編曲作品を手掛けるなど、活動ぶりは戦後を謳歌するかのごとく彩られている。

「夜の女たち」は1948年に溝口健二監督、田中絹代主演で公開された松竹映画。敗戦後の都市、大阪の夜を背景に生きていた娼婦たちの群像を描いている。キネマ旬報ベスト・テン第三位に入り、田中は毎日映画コンクール女優演技賞を受賞。溝口と大澤の共同制作は他に「歌麿をめぐる五人の女」（1946年松竹映画）がある。

音楽は監督の指示により封切を延期して一部書き換えられたが、大澤は映像と音楽の関係について得るところがあったようで、「私は溝口監督の映画への音楽の在り方をもっと研究しなければならないと思う」と述べている。

《夢の花》は、自筆楽譜冒頭に「日本ノシャンソン集 “夜の女たち” 主題歌 夢の花」(原文のまま)と書かれ、神戸女学院大学の同僚、喜志邦三（1898-1983）の詩によって作曲された。(詩原稿所在不明のため、以下におけるスペース部分は音楽上の休符の位置を示す)。

きみがすてたはなたば あかいバラのはなたば  
とげられぬ こひのなごりを むねにいだくはかなさ  
をんなごころのまごころを つげぬむねのせつなさよ  
こひをわたしはあきらめて ちつてかれるゆめのはな  
さみしいよの かげに はなびらやぶれ  
こひをわたしはあきらめて ちつてかれるゆめのはな

喜志は大澤の創作において重要なパートナーの一人であった。戦中には独唱・合唱を伴った管弦楽曲《夢殿観音》(1940年)や音楽劇《つばめ通信第二信》(1943年)など、戦後にはNHKラジオ歌謡・ABCホームソング・校歌など、多くの作品を共に世に送り出している。

戦中の大規模な作品に対し、戦後の小品は洗練された味わいで、大澤がセミクラシック領域での創作を楽しんでいた余裕を感じさせる。晩年近くのインタビューでは、戦後の音楽の新しいあり方について、音楽の「中間層」という言葉を用いて語っている。「誰にでも親しまれて、しかも芸術性を失わない音楽」がこれまでの日本には欠けていたと力説しており、シャンソンもその質の高い「中間層の音楽」に適したジャンルと捉えていたと思われる。「日本生まれのシャンソン」をセミクラシック領域に開拓しようとしていたのだろう。

「ABCホームソング」に関しては、帰国した1936年2月に時期をさかのぼりたい。大澤を迎えた当時の日本は戦事の道を歩みつつあった。留学の成果を披露するため、1936年には東京と大阪で「婦朝演奏会」を連続開催。翌年も同様に新作発表会を続けるが、大規模な作品発表は1940年5月大阪が最後になる。開催が困難になっていったのである。

こうした状況のなか、替わって音楽発信のための貴重な「場」となり、「媒体」となったのが「ラジオ」という先端のメディアであった。NHK東京放送局（JOAK）、次いで大阪放送局（JOBK）が戦前1926年に本放送を開始。大澤は帰国年に音楽劇《山の協奏曲》を作曲、以来放送作品は総数で130近くのにほり、「ラジオの寵児」ともいえる活躍を繰り広げることとなった。

日本初期の民間放送の一つとして、朝日放送（Asahi Broad Casting Corporation）が開局するのは戦後の1951年で、大澤は準備段階から音楽面に携わっていた。11月11日開局当日、正午の開局アナウンスに続いて流れたのは《朝日新聞ニューステーマ音楽》。もちろん大澤の作曲で、朝日放送はまさに大澤の音楽と共に始動したといえる。

1952年9月から始まった「ABCホームソング」も大澤が企画、作曲、編曲とすべてを手掛けた番組である。月曜から金曜に独唱版と合唱版で放送され、週が替わると新しい歌が紹介された。1曲ごとに個性の異なるホームソング集は今聴いてもおしゃれな「歌の花束」で、半世紀以上も前に作曲されたとは思えない。当時間も人気を呼んでいたが、作曲家が1953年10月に急逝したため第49週で中断。後に復活して朝日放送を代表する長寿番組になった。

《木の下ワルツ》は石山清三作詞による最終回の曲、樋本栄独唱で1953年10月19日より放送。一方、《母の愛》は山田民子作詞、竹中郁校訂による初回の曲、奥田智恵子独唱で1952年9月1日より放送された。

#### 《木の下ワルツ》

雨をさけてたたずんだ 町の並木のたそがれに  
ほのかにきくあのワルツ 花のワルツのやさしさよ  
むせぶ夜霧にせまるしらべ 花のかをりみちるここの  
かげにうるむ思い出よ 君がえくぼのいとしさよ

#### 《母の愛》

こんがりパンはきつね色 坊やのためよこのパンは  
ラジオのうたにききほれて ミルクは煮えてこぼれます  
頬ずりしたい朝のうた

以上の「戦後のセミクラシック作品」は、3期の年齢区分（前期 20 歳代～中期 30 歳代～後期 40 歳代）にあてはめると「後期 40 歳代」における創作である。

対比してお聴きいただく以下の「戦前の前衛的作品」は、1930 年代「前期 20 歳代」の創作で全く異なった作風を示している。

大澤がボストン大学音楽学部に留学したのは戦前の1930年。関西学院高等商業学部を卒業したばかりの24歳であった。1932年からはニューイングランド音楽院にも籍を置き、日本人初の作曲専攻生として研鑽を積んだ。

作曲の勉強は驚異的な成長をみせた。1932年12月頃から才能が一挙に開花して創作力が溢れだし、1933年6月ボストン大学卒業までの半年間に《小交響曲》《ピアノ協奏曲》などの管弦楽作品、《ピアノ三重奏曲》《ピアノ五重奏曲》などの室内楽作品が次々に生まれた。これらの大作とはほぼ並行して、ピアノ独奏曲《富士山 Mt. Fuji》《小デッサン集 Les petits dessins》《ソナチネ ホ短調 Sonatine in E minor》は完成している。

3曲を構成法や作風の観点から要約すれば、日本の伝統的な旋律を素材にするものと、西洋の先端的な音楽語彙を展開しようとするものに分かれる。《富士山》が前者、《小デッサン集》《ソナチネ ホ短調》が后者である。

1933年2月6日に書かれた《富士山》は、第1頁に「広重から着想を得たピアノ組曲」と英語で記されている。しかし組曲としては完成せず、この1曲のみが遺された。

3部分形式で、イ短調～ハ短調～イ短調の調性を示すなか、律音階を骨格とする旋律が登場して日本の情緒を醸し出す。また、この時期の大澤が好んだ「グリッサンド」も用いられ、演奏効果を上げている。創作以来79年を経た本日が世界初演である。

《小デッサン集》は1934年に完成し、当時のボストン大学音楽学部長、J. マーシャルに捧げられた。5曲から成る小組曲で、全体の演奏時間も5分に満たないが、1933年と34年の間に起こった変化を示している点で重要な作品である。すなわち、33年までみられた「調号」がこの作品にはみられない（複調を除く）。作曲界の趨勢であった「無調」に挑み、1曲ごとにエチュード風にまとめた先端の語彙を追及している。

初演は「巴里室内楽会」と大澤が作品表に記しているので1935年と推定される。本日は77年ぶりの復活演奏にあたる。

第1曲は、無機的な無調旋律と調的な三和音の響きが左手と右手で対照する。第2曲は複調で、五音音階の旋律が用いられているため民謡を感じさせて穏やか。第3曲は拍節感を喪失させ、ポリリズムの可能性を探る。第4曲は短いオスティナート上に、不協和音がもつ管弦楽的音色を追及。第5曲は、変拍子を多用する第1-4曲とは異なり4拍子を終始保つ。拍子の安定のもとに4度の累積和音、隣接半音や白鍵と黒鍵のぶつかりなど、無調におけるあらゆる音高選択が試されている。

1933年5月完成の《ソナチネ ホ短調》は、大澤のピアノ独奏作品の中で最も規模が大きい。翌年ボストンで初演された際のプログラムには《ソナチネ第3番》と記されているので《ソナチネ》は他にもあったと思われるが、現存しているのはこの作品だけである。

日本初演は1939年、帰国後に会員となった日本作曲家連盟の「第9回作品発表会」で、同年龍吟社から出版（数少ない大澤の生前出版の一つ）、1940年に国際現代音楽祭への提出曲となった。



第2楽章は「ややゆっくりと アダージョのように」と指示された中間楽章。ト短調の調号をもつが機能和声の進行はみせず、旋律も主音と属音を骨格とするのみで、無調との境界にある。冒頭2小節の主題旋律が多様に装飾されてゆき、管弦楽大作を得意とした大澤の各楽器への音色感が織り込まれている。

第3楽章は「速く 生き生きと戯れるように」。ピアノの音域を広く使った和音と弦や管楽器独奏の様なパッセージが A-B-A-C-A 小ロンド形式のうちに交替する。同時期に日本最初期の《ピアノ協奏曲》を書き上げた大澤らしい、力感あふれる終楽章である。

なお、《富士山》《小デッサン集》は、Ⅱ部で演奏される《丁丑春三題》や、《三つのプレリュード》《六つのカプリチュエティ》《パターンズ》と共に、カワイ出版『大澤壽人ピアノ曲集』に収録されている。自国が誇る作曲家の作品として、日本人ピアニストのレパートリーに入ることを願うものである。

さて、ボストンで新進作曲家として頭角を現した大澤は、次にフランスに向かった。1934年9月にジョージック号で出帆し、イギリスを経て10月にパリ到着。N・ブーランジェの個人レッスンを受け、P・デュカ最後の弟子の一人となった。

当時のパリには、難を逃れて自国を離れた外国人音楽家たちが住んでいた。「パリ楽派」と呼ばれた彼らの活躍で楽壇は華やかさを増した。1930年代に訪日したロシア人、A・チュレプニンやポーランド人、A・タンスマンも「パリ楽派」であり、大澤は後に「日本からのパリ楽派」と認められるほどのパリ・デビューを果たすことになる。

その演奏会は1935年11月8日にサル・ガヴォーで開催。大澤はコンセール・パドゥルー管弦楽団を率いてベルリオーズやラヴェルなどの作品を指揮し、自作3曲を発表した。

当夜は「フランス六人組」のオネゲル、ミヨーに加え、イベール、グレチャニノフなど、20世紀前半の西洋音楽史を彩る作曲家たちが来場。演奏会評ではイベールが「天賦の才能」と称賛し、ブリアンという批評家が「パリ楽派」に例えた。当時の日本人音楽家としては稀な成功を収め、華麗な経歴を築いたのである。

《桜に寄す Une voix à Sakura》は《交響曲第二番》《ピアノ協奏曲第二番》と共に、その夜初演された管弦楽伴奏による歌曲である。独唱者はロシア人ソプラノ、マリア・クレンコ（1890-1980）。モスクワ音楽院で学び、1914年にオペラデビュー。ヨーロッパの演奏会にも出演しながら、1925年にアメリカ移住。既に名声を確立したオペラ歌手で、当時日本でもレコードが発売されていた。

歌詞は大澤自身によるもので《さくらさくら》が自由に引用されている。以下に日本語で記すが、自筆譜にはクレンコのためにローマ字で書きこまれている。歌曲のジャンルにおける大澤の代表作として、今後も歌い継いでゆきたい名品である。

ああ、ふるさとの春の想いは  
さくらさくらと歌うころ  
弥生の空は 見渡すかぎり 霞か雲か 匂いぞ出する  
(ハミング)花に慕うとも いにしえのままに歌い  
いざやいざや 見にゆかん

## Ⅱ部：1920・30年代パリ楽壇の輝きと 日本の交流、そして戦中

1935年11月、先述した大澤のパリ・デビュー演奏会で《ピアノ協奏曲第二番》の初演ソリストを務めたのはアンリ・ジル＝マルシェックス（1894-1970）であった。

第Ⅱ部前半は、このジル＝マルシェックスが初演した3作品を演奏し、大澤が滞在した頃の世界楽壇パリと当時の日本の交流、また大澤の成功の華やかさを紹介したい。

ジル＝マルシェックスはピアニスト・作曲家で、パリ在住。モーリス・ラヴェルや「フランス六人組」などの作曲家たちや、アンリ・マティスなどの画家たちと親交があり、芸術に情熱と財産を注ぎ込んだ富豪、薩摩治郎八とはジャンヌ夫人を通して交友関係にあった。

小林茂氏による評伝『薩摩治郎八』によれば、夫妻は1925年3月にモナコでラヴェル作曲、歌劇《子供と魔法》の総練習を見学している。側には「六人組」のオネゲルやオーリックという華やかな顔ぶれも揃っていた。

同年10月、大正末期にジル＝マルシェックスは薩摩によって招聘されて初来日。東京の帝国ホテルで行われた6回の連続演奏会を開いた。プログラムは薩摩が作成、豪華な冊子は表紙にマティス作のジル＝マルシェックス素描が用いられている。

連続演奏会ではフランス作品を大量に紹介し、ドイツ音楽に傾いていた当時の日本音楽界に衝撃を与えた。白石朝子氏の調査によれば、演奏曲目には日本初演が50曲、世界初演も1曲含まれており、その1曲がラヴェル作曲、ジル＝マルシェックス編曲《子供と魔法》より〈五時のフォックストロット〉であった。すなわち、ジル＝マルシェックスは3月に聴いたラヴェルの新作歌劇から早速ピアノ用作品を編曲し、10月24日に日本で自ら世界初演して、当時のフランス楽壇の輝きを直接に伝えたのである。

《子供と魔法》はフランス・ノルマンディー地方の農家を舞台に、宿題嫌いの男の子を中心に繰り広げられる2幕の歌劇で、バレエが取り入れられている。男の子が嫌さの余りに家具や母親の運んできたティーポットを壊しておもしろがっていると夕方になり、家具たちが動き出し、動物や植物も登場して男の子を懲らしめるという筋書きである。

〈五時のフォックストロット〉はダンスのリズムに乗って歌われる2曲からの編曲。形式は A-B-A に大きく分かれ、Aは第1幕のティーポットとカップ、Bは第2幕のトンボ・鶯・蛙による歌である。ジル＝マルシェックスはAを4拍子の「フォックストロット」、Bを3拍子の「アメリカのワルツ」と楽譜に記している。題名は20世紀初期にアメリカで人気のあった社交ダンスの一つ。

旋律やリズムはラヴェル原曲に忠実でありながら、ピアノの広い音域を駆使してダイナミックに展開されるこの作品は、単なる「編曲」を超えた「ラヴェルにもとづくピアノ独奏曲」に仕上がっている。

さて、初来日したジル=マルシェックスの演奏を聴いて松平頼則が作曲家を志したこと、梶井基次郎が小説『器樂的幻覺』を書いたことなどはこれまで明らかになっていたが、大澤もまた大いなる刺激を受けた一人であった。

ジル=マルシェックスは東京の後、日本各地を巡って演奏会を開いている。11月25日に神戸を訪れた際、会場となったのは関西学院中央講堂で、大澤は中学部に在籍する生徒だった。母校のホールで聴いたジル=マルシェックスの演奏に感銘を受け、自らも音楽の道を選んだのである。

(そして10年後、留学を経て新進作曲家に成長した大澤は、自作《ピアノ協奏曲第二番》のバリに於ける世界初演ソリストを彼に依頼することになる。何という運命的な、また華やかなめぐりあわせだろうか…)

ジル=マルシェックスの来日に話を戻すと、上記1925年の初来日以降は1931年に2回と1937年、計4回の来日を果たしている。

作曲家でもあった彼は、滞在時に触れた日本の音楽を素材にしてピアノ作品を作曲しており、ジル=マルシェックス作曲《古き日本の二つの映像》はこうした経緯から生まれている。まず〈出雲の秋月〉続いて〈吉原からの帰り〉が作曲され、ピアノの師アルフレッド・コルトーに捧げられた。1934年に著作権が取得されているので、正確な創作年はそれ以前と推定される。

《古き日本の二つの映像》にはジル=マルシェックス自身による前文が記されている。要約すると：

この作品は日本の音楽を模倣するのではなく、日本で受けた印象から生まれた。副題は雲囲気を暗示する程度の役割で、〈出雲の秋月〉は神無月に出雲に集う神々の場面、〈吉原からの帰り〉は北斎や広重の版画のように、遊郭から出た男衆が千鳥足で歩いている場面である。

〈吉原からの帰り〉は E 音上の日本の旋律に始まる。祭りの囃子のリズムや私たちに耳慣れた旋律が登場するので表層は日本的であるが、構造はさわめて西洋的である。形式は変形された大ロンド形式 A-B-A-C-A-B-A- コーダで、バス進行は冒頭の E→A から開始して最終音 D に至るまで、完全 5 度の下行進行 (D→G→C…→D) が続く。西洋の伝統的和声法の根幹である根音進行が全曲を貫き、1 オクターヴの 12 音をすべて経てゆくその上部で、日本の旋律が繰り返されているのである。

自ら初演したのは 4 度目の来日時、1937 年 5 月東京の明治生命講堂に於いてであった。この「1937 年」は、大澤とジル＝マルシェックスにとって重要な再会の年である。2 年前にパリで作曲家と初演者として親交を結んだ二人。帰国した大澤と来日したジル＝マルシェックスが、今回は日本で、芸術家同士の関係をさらに深めたからである。

3 月 28 日に東京に着いたジル＝マルシェックスは、4 月 7 日に日比谷公会堂で開かれた神戸女学院同窓会主催「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」にまず友情出演し、プログラムになかったドビュッシー作品を大澤のために演奏した。続いて各地で演奏会を開いた際には、7 月 3 日神戸海員会館で、後述する大澤作曲《<sup>ていしゅうはるさんたい</sup>丁丑春三題 Trois morceaux de printemps “Teichu”》を世界初演したのである (3 月と 7 月の日付は白石氏による調査)。

これら 1937 年初演の 2 作品、ジル＝マルシェックス作曲〈吉原からの帰り〉と大澤作曲《丁丑春三題》を並べて聴くと、二人の音楽上の交流のみならず、かけ離れた文化をもつ西洋と東洋の国が当時互いに抱いた異国への関心と憧れが感じられる。冒頭、ハーブを想わせる音色豊かなパッセージが空間を拡げてゆくように、二人は共にドビュッシーの影響を受けている。その影響下に、日本の旋律を取り入れたジル＝マルシェックスの西洋的感性と、西洋の作曲技法を身につけた大澤の日本の感性が往来してゆく。

75 年も前の日本でこのような質の高い交流があったこと、及びそれを実現させた大澤の功績は大きい。我が国の洋楽史において高く評価されるべきであろう。

ここに 1937 年の時系列を整理して記す。

4月7日:日比谷公会堂 (東京)「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」ジル＝マルシェックス友情出演

5月27日:明治生命講堂 (東京)ジル＝マルシェックス作曲《古き日本の二つの映像》

ジル＝マルシェックス世界初演

7月3日:海員会館 (神戸)大澤作曲《丁丑春三題》ジル＝マルシェックス世界初演





神戸で初演された《丁丑春三題》は小品3曲より成る組曲で、「春宵紅梅、impromptu désœuvré (無為即興)、春律酔心」の副題をもつ。「丁丑」は十干の「丁」と十二支の「丑」の組み合わせで、作曲年が丁丑にあたる。

〈春宵紅梅〉は自筆譜冒頭に「Nocturne (夜想曲)」と書かれている。3部分に分かれ、右手が奏する分散和音によって区切られる。一方、左手は断片的な旋律を奏し、最々弱音「PPPP」のうちに消えてゆく。やわらかな印象を与える美しい小品で、右手の旋律的中心音はF#、左手の構造的な中心音はG#と、明晰な書法によって構成されている。

〈無為即興〉は茫漠とした雰囲気醸し出す。ゆるやかに落下する右手の旋律によって、2部分に区切られる。第1曲とは楽想が全く異なるが、右手の旋律的中心音をF#、左手の構造的な中心音をA♭(G#)としており、音高が統一されている。

〈春律酔心〉は「Caprice (奇想曲 気まぐれ)」と書かれた楽章。右手の動きの速いパッセージによって区切られる4部分とコーダ部をもつ。酒宴の千鳥足や、聞こえてくる《元禄花見踊》の旋律や、春爛漫の気分はピアノの広い音域を駆使して高められ、左手の構造的な中心音A♭はここでも貫かれている。

《丁丑春三題》が示すのは大澤の発想力の豊かさであろう。音高の統一、リズムや拍節の自由、和音や音域の多彩など、留学期に身につけた西洋的書法の確かさによって日本的感性が瑞々しく表現された、大澤のピアノ独奏曲ジャンルにおける傑作といえよう。

以上のように、1937年はジル=マルシェックスとの交流によって大澤の内面に実り多いものだったが、外面を取り巻く環境は悪化し、留学期と帰国後の落差は開くばかりとなった。太平洋戦争への突入である。

1942年作曲のソプラノ独唱のための組詩曲《便り》は5曲より成る。中野繁雄（1915-57）の詩に基づく連作歌曲で〈武運長久祈願、ゴム毬、吾子成長す、豊年、銃後〉から構成されている。

中野は大澤と共に作品を作った詩人グループの一人。喜志邦三、竹中郁、富田碎花たちと同様に関西在住で、従軍の体験を書いた戦線詩謡『馬と往く』（1941年）などの作品がある。中野の詩を取り上げた大澤の作品は他に、管弦楽伴奏によるソプラノ独唱と女声合唱のための《天翔ける神》があるが、自筆譜は失われた。

戦中に書かれた中野の詩は、当時の生活風景を描く。出征兵士の家族や子供たちの遊ぶ姿などを通じて、日常のなかで人々が抱いた感情を映し出しており、大澤の音楽も留学期の作品とは違って変わり、調性の明確な理解しやすい作風を示している。

初演は1942年10月10日大阪朝日会館に於ける「関西楽壇人大演奏会」、ソプラノ加藤千恵、ピアノ飯尾恭子。本日はそれから70年目の復活演奏である。

## 一、〈武運長久祈願〉

肌寒き夜半 月も寝ぬるに 百度踏み  
産土神に吾が夫を  
弾にはよけれ 病みては還し給ふなど  
伏して拝む柏手に  
ほのぼのひがし 明け初めぬ

## 二、〈ゴム毬〉童詩

テンテ手鞠 今年の毬は 南の国で  
いくさしてる 兵隊サンの 贈りものだ  
大事につこう 仲よくつこう

## 三、〈吾子成長す〉

君往く朝 吾が背なに 今日歩みて  
小旗打ち振り バンザイ叫ぶ 此の姿  
みたまほし 北護る君に

## 四、〈豊年〉

空は青く 千切れる雲の 彼方此方に  
祭りの太鼓 囃子の笛が  
黄金の波を ユラリ揺すれば  
豊年じゃ 万作と  
雀は踊る 案山子も踊る

## 五、〈銃後〉

吾が町は 和やかに美はしく  
ことあらば 隣は援け  
征く家に 力を分けて惜しみなく  
おみなは凜々し襷がけ 焼夷の弾も恐れじと  
バケツリレーも手際よき 戦野に恥じぬ守りあり



参考文献:小林茂『薩摩治郎ハーパー日本館こそわがいのちー』、白石朝子「アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試みー4度の来日(1925-1937)における音楽活動と日本の音楽研究をもとにー」

※大澤壽人の姓と生年は、通説とは異なる事が調査で判明した。正しくは、「おおさわ」で、「1906年」生まれである。大澤が楽譜にOZAWAと自署しているのは、外国で発音される場合をあらかじめ想定したと思われる。今後は本来の読みである「Osawa」を用いる。

主催:大澤資料プロジェクト

協賛:ザ・フェニックスホール あいおいニッセイ同和損保

後援:クラブファンタジー(神戸女学院大学音楽学部同窓会)

